

激闘のセンバツを終えて 選手のコメント紹介①

赤鬼の春Ⅱ 文 58

増居翔太君

第90回記念選抜高校野球大会に出場した野球部員が4月1日に本校に帰ってきた。これから数号に渡ってベンチ入りメンバー、2年生野球部員、マネージャー、部長、顧問の先生方のコメントを紹介する。

エースを務めた増居翔太君(2-4)は2度目の甲子園について「2回目の甲子園ということで球場の雰囲気はわかってきたが、緊張した」と感想を寄せた。また花巻東戦で9回までノーヒットノーランであったことについて「3回が終わったぐらいにノーヒットに気付いた。9回までどうなるか分からなかったのでヒットを打たれてもしつかりしようと思った。ヒットを打たれたときは、やっと打たれたか

速報新聞

キマグレ

発行所
彦根東高等学校

新聞部

彦根市金亀町4番7号

高内希君

主将である高内希君(2-8)は甲子園を振り返って「増居が良いピッチングをしてくれたので、バッテリとしてはとても良かった。しかし打撃面でチャンスを上手く活かせず、増居を援護することができなかったのが残念だ。5年前の夏のリベンジをすることも、目標にしていた2勝以上を達成することもできなかった」と悔しさをにじませた。また甲子園の試合から学んだことを「守備では増居の投球が全国に通用するということが確認できた。攻撃はまだ物足りないが、これから成長していける余地があると思う。まだまだ力不足ではあるが、全国の舞台で戦えるということはわかった。夏はライバルが多いので、勝ち切れるように練習していかねければならない」と説明した。高内君は捕手として投球を構成する上で意識したことを「慶応戦ではストリートを多めにしたが、花巻東戦では相手がストリートに絞ってバットを振っていたから、狙いを外すため

に変化球を多めにしていた。相手はタイミングを取れていなかったので上手くいったと思う」と明かした。また「スクイズやバントの失敗など、攻撃に甘いところが見られた。どのように点を取るかということを意識して攻撃の形を作り、自分たちの攻撃に自信を持てるレベルまで上げていきたい。そのためには一人ひとりの打撃力を上げ、全国のレベルについていけるように鍛えていくことが必要だ」と課題を挙げた。

秋からの取り組みを振り返り「今のチームは先輩たちを超えることを目標にして頑張ってきた。先輩方ができてきたことは当たり前でできなければならぬが、普段の一つひとつの練習に対する意識は前のチームと比べると低かった。まだまだ足りない部分が多かった。練習では先輩方に近づけるように意識してきた」と話した高内君。最後に夏に向けて「甲子園での悔しさを晴らせるのは甲子園だけなので、夏にもう一度あの舞台に戻りたい。たくさんの人に成長した自分たちの姿を見せられるように、残り数か月間の練習に取り組んでいきたい」と語気を強めた。